ブランディング・シンポジウム開催

健康長寿社会の実現へ

昨年の11月23日、第7回学習院大学ブランディング・シンポジウム『超高齢社会を科学するⅣ〈健康長寿社会のテクノロジー〉』が開催された。

文部科学省が採択した私立大学研究ブランディング事業の一つである本イベント。本学では、平成28年から、年2回の頻度で開催している。文部科学省からの支援は本年度をもって終了するが、本学は来年まで自力で本事業を継続する予定だ。

第7回目を迎える今回は、国立健康・栄養研究所の阿部圭一理事兼所長、㈱エーザイの冨田清行氏、シスメックス㈱の鈴木健夫氏、ノンフィクション作家の歌代幸子氏の4名が登壇した。司会は、本学の理学部生命科学科・嶋田透教授、高島明彦教授が務めた。

はじめに、阿部氏は人生100年時代における健康のために必要な「フレイル」の予防について論じた。健康と要介護の中間の状態を意味するフレイル。適度な運動と、バランスの良い食事によるタンパク質の摂取が、予防のために不可欠であるという。阿部氏は「身体と心の健康とともに社会とのつながりも重要な要素となります」とフレイル予防のポイントを強調した。

次に、冨田氏は認知症を取り巻く社会環境と、その課題解決について説明した。まず、MCI（軽度認知障害）について紹介し、早期発見と早期対応の重要性について訴えた。そのうえで「患者様、そのご家族、そして私たちが共生できる社会を目指しております」と力説。これらの理念の実現に向けて、エーザイでは認知機能チェックをはじめとする様々な事業を展開しているという。

続いて、鈴木氏は臨床検査の観点から講演を行った。冒頭で、医療費が国家財政の大きな負担となっている現状について言及。予防検査による早期発見、患者一人一人に適した医療の普及こそが、その打開策となりうるという。鈴木氏は「知らず知らずのまま発症・治療する時代から、検査で予防し薬を選択する時代へと移行するでしょう」と、真の健康社会の実現に向けた予測について述べた。

最後に、歌代氏は『100歳の秘訣』（新潮新書）の執筆に向けた取材経験に基づくエピソードを披露した。105歳で亡くなった医師の日野原重明氏との出会いを経て、本書では日本初の女性報道写真家である笹本恒子氏など、100歳を超えた10名の方々を取材した歌代氏。「自分にしかもてない生きがいを皆さんもっていらっしゃいました」と彼らの共通点を語る。日々の生活の些細な喜びや楽しみ、生涯における夢こそが、長生きの秘訣なのかもしれない。

世界でも例を見ない超高齢社会に突入した日本。今後、その度合いが急激に加速することは不可避の事実だ。健康に長生きするためにはどうすればよいのか。当事者意識をもってこの問題に向き合うことが、私たち若い世代に求められている。（横山浩人）

歌代氏、阿部氏、冨田氏
鈴木氏、高島教授、嶋田教授（左から順に）

学習院研究最前線

学問研究の「いま」

市民生活に関わる法律「民法」

法学部法学科　山下 純司 教授

PROFILE

東京大学法学部卒業。同大学院法学政治学研究科助手。学習院大学法学部専任講師、学習院大学法学部助教授を経て、平成20年より学習院大学法学部教授。現在は、日本私法学会、信託法学会、法と教育学会に所属。国家公務員総合職試験委員、司法試験委員も務める。

◇　◇　◇

山下先生は、民法を専門として、契約法、信託法について研究されている。今回は、先生の研究内容や、民法とはどのような法律なのか等について、お話を伺った。

（取材・構成　清水彩花）

◇　◇　◇

現在の研究に至るまで

学生時代から、論理的に物事を考えることが好きであったため、法学部に進学したという先生。民法は、憲法や刑法とは異なり、私たちの生活に身近な場面で使用される。民法を専攻した理由について次のように話す。「暮らしやすい社会の実現のために、法律がどのように役に立つのか関心を持ちました」。

取引のルールとしての民法

民法は、主に2つの側面がある。1つ目は、消費者トラブルなど、取引に関するテーマである。2つ目は、親子関係や婚姻関係など家族に関する問題だ。先生は、高齢者や未成年、婚外子の保護などを研究対象としている。現在は、高齢者の金融取引に関心を持っている。

先生は、高齢者の金融取引の問題点について「現代の高齢化社会は金融取引の分野に新たな問題を引き起こしています。例えば、認知症の高齢者が安全に預金を管理するための仕組みづくりが求められています」と話す。

今後の研究の展望

これから研究していきたいことについて、次のように語ってくれた。

暮らしやすい社会のために

「判断能力が衰えた高齢者が社会生活を送るには、家族や知人と話し合っておくことも大切です。事前の取決めが法的にどのような意味を持つのか、議論していきたいと考えています」。

教育者として

法学は、ルールによって人と人との関係を円滑に取り運ぶための学問だ、と先生は考えている。「法律を学ぶことにより、ルールを使って考えることが身につくため、様々な職業に役立つと思います」。

最後に、法律を学ぼうとしている学生へ、メッセージを頂いた。「学生の間は色々なことに挑戦できる時期なので、色々な勉強をしてほしいと思っています。法律は社会の基礎をなすルールです。法律の勉強は社会全体を分かっていないと理解できないので、大学時代に勉強以外にも、色々な経験を積んでおくとよいと思います」。

市民生活に関わる法律「民法」。暮らしやすい社会のために、民法を通して現代社会を研究する、先生の今後に期待するばかりだ。

輔仁会弓道部 百周年記念行事

本学の輔仁会弓道部の百周年記念行事が、昨年の11月16日に開催された。弓道部の創部百周年を祝い、現役部員、OB・OGを含めた約170名が参加した。

第一部では、富士見会館弓道場にて祝射会が執り行われた。百周年を寿ぐ祝射は、射礼の一つであり、現代弓道では射の基本となる態度・動作・射法射技を示す弓道の形とされている。

今回、弓道部監督の小平稠氏（昭和43年卒）が本多流射法による祝射を行った。続いて、主将の望月修斗さん（政3）、女子主将の内海はるかさん（心3）、女子大主将の石川優花さん（国日3）の3名が全日本弓道連盟の統一射法による順繰りに回って射る一つ的射礼を行った。ピンと張り詰めた空気の中、集中力を研ぎ澄まして矢を放つ。静かなる躍動感にあふれたその一射は、まさに圧巻であった。

学生3名は「100年の歴史の重みを感じ、とても緊張しました。これから150年、200年と弓道部の伝統が続いてほしいです」と、真剣な面持ちで祝射を振り返った。さらに、小平氏は現役部員へのエールを笑顔で語る。「弓道では、技術だけではなく品性や教養が必要です。この精神を胸に、活動に取り組んでもらえればと思います」。

弓道部は、本多流の射法を採用している。本多流の歴史は、明治時代にまで遡る。本多利實が興したこの流派。品行徳行・体育・衛生を重視しているのが特徴である。本学の弓道部では、創設時に初代師範を務めていた大内儀一の流れを汲み、現在に至るまでこの流派の射法に倣っている。

第二部では、百周年記念会館にて祝賀会が行われた。来賓として本多流宗家四世の本多利永氏をはじめ、桜弓会会長の北村則之氏（昭和39年卒）、副会長兼周年行事委員長の小倉吉晴氏（昭和54年卒）が参加した。代表として、北村氏は「今後とも、皆様の支援を頂きながら、伝統を維持し、学習院弓道としての気品を持って弓道に励んでもらいたいです」と激励の意を込めて語った。

一射に己の力の全てを注ぐ弓道の世界。この精神をもって、テスト勉強など、日々の学生生活に懸命に取り組むことが、我々にとっても大切なことだといえるだろう。（小泉凛太郎）

祝射を行った小平氏

一つ的射礼を行った三主将

情報特急便

学習院さくらアカデミー特別講座

戦後日韓関係はどう展開してきたのか
「近くて遠い」隣国との関係を捉えなおす

日時：2月15日（土）13時30分～15時
講師：久保田　福美氏
会場：中央教育研究棟
費用：1650円

幸せを呼ぶ朝ドラの「○」と「ん」の法則

日時：3月7日（土）13時30分～15時
講師：磯崎　典世氏
会場：中央教育研究棟
費用：1650円

『来ぶらり』の魅力に迫る

本学大学図書館が発行する広報誌『来ぶらり』をご存知だろうか。今回はその制作・編集に携わっている図書館司書の内藤氏に取材を行った。

同誌は昭和58年、前身である広報誌『かるね』を引き継ぐ形で第1号が発行された。学生に図書館のサービスを知ってもらい、身近に感じてもらうことが目的である。留学生座談会や学部長へのインタビューなど、様々な企画が掲載されている。

内藤氏は「読み物として作ることを意識せず、視覚的にポップになるよう心がけています。クオリティについて、他大学の図書館関係者の方からお褒めいただくこともありました」と同誌の特徴を語る。一目見て必要な情報がわかる構成や、鮮やかなデザインは大きな魅力である。

最後に内藤氏は「熟読するものではないので、気軽に手にとってめくってもらえるだけでも嬉しいです」と話した。次号は「ITスキル特集」と題し、情報処理に関する本の紹介を行うそうだ。

同誌は大学図書館のラックに配布されているほか、WEBサイトにも掲載されている。学生の皆さんも、ぜひ一読してほしい。（吉田愛）

明窓浄机

皆さんのやりたいことはなんだろうか。私にはやりたいことがたくさんある。好きな音楽やラジオを聴きたい。ライブに行きたい。映画やアニメを観たい。友達と話したり遊びに行ったりしたい。ハロウィンやクリスマス、年越しなどの季節の行事を楽しみたい。一人で遊びに行きたい。風呂にゆっくり浸かりたい。本や漫画を読みたい。ゲームをしたい。毎日満足するまで眠りたい。美味しいものをたくさん食べたい。学びたいことを学びたい。▼私にはやりたいことがたくさんある。私のやりたいことは楽しいことだ。今私が思いつくだけでも多くの楽しいことがこの世界には存在しているが、私の知らない楽しいこともまだ数多くあるだろう。人間界には、もはや享受しきれないほどに、楽しいことがたくさん存在しているのだ。▼そんな世界で生活をしているのだから、やりたくないことや楽しくないことをしている暇はない。ただでさえ楽しいことが溢れているのだから、そんな雑事に構っている暇はない。私は楽しいこと、すなわちやりたいことをしたい。いや、しなければならないのだ。（棚）

学習院大学新聞

発行所
学習院大学新聞社
〒171-8588 東京都豊島区
目白1丁目5番1号
黎明会館316号室
電話 03（3986）0221 内線 2607
発行　井ヶ田友一
編集人　清水　結衣
年間500円

BOOKS KINOKUNIYA
紀伊國屋書店
学習院大学ブックセンター
2019.10.01
GRAND OPEN
☎03-5953-4420

2 SNS犯罪の被害に遭わないために

3 手軽に楽しめるおすすめ鍋料理を紹介

紙面紹介

4 意地の勝利

一部に所属している本学ラクロス部女子の入れ替え戦が、葛飾区奥戸総合スポーツセンターにて行われた。

学習院大学新聞社
@gakushuinpress
一緒に新聞を
作りませんか？
新入部員随時募集中！
気軽に follow me!

学習院大学史料館　令和二年度　春季特別展
学習院とスポーツ
令和2年 4月1日（水）▷ 5月30日（土）
◆会場　学習院大学史料館展示室（学習院大学　北2号館1階）
◆開室時間　10：00 ～ 17：00
◆ギャラリートーク　4月12日（日）・5月16日（土）
◆閉室日　日曜日・祝日・5月15日（金）※4月12日は特別開室日となります
入場無料
学習院大学史料館ＨＰ https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/
https://twitter.com/g_shiryokan
主催 学習院大学史料館　共催 一般社団法人 霞会館
背景『大礼奉献学習院写真』（大正4年刊行 当館蔵）より

未成年を狙うネット犯罪

昨今、SNSを通じた未成年を狙う犯罪が増えている。便利な一方、大きな危険性をはらむSNS。犯罪から身を守るためには何が必要なのだろうか。

子どものSNS被害

近年、SNSを発端とした誘拐、監禁事件が相次いでいる。その中でも特に被害者が未成年、特に小・中学生であるケースが目立つ。

昨年9月には、福島県の少年少女を自宅に連れ去ったとして、埼玉県の男が逮捕された。11月には、大阪府の小学6年生の女児が誘拐、栃木県内で7日間にわたり監禁される事件が起こった。さらに同月、埼玉県の男が兵庫県の中学生2人を2ヶ月間自宅近くの住宅に住まわせていたとして逮捕された。

全く接点がなかった大人と少年少女をいとも簡単につなげてしまうSNS。これらの事件の共通点は、「家出しました」「つらい」などという書き込みに大人が反応し、児童の不安定な心に付け込んだことである。また書き込み内容から、SNSが児童の悩みのはけ口となっていることが懸念される。一昨年には大量殺人も発生した。神奈川県座間市の15～26歳の男女9人が殺害された事件であり、続け昨年には1811人に昇った。うち小学生は平成29年には14人だったが、昨年は55人にも及んだ。約四倍もの小学生が被害に遭っているのだ。

児童の犯罪被害増加の理由の一つには、スマートフォン利用率の増加が考えられる。内閣府の調査によると、スマホの利用率は小・中学生の間で平成29年から昨年にかけて急増し、それぞれ約45%、約70%となったことがわかっている。小学生のSNS利用状況に着目すると、昨年の東京都教育庁の調査によると、調査によればLINEは37%、Instagramは8%、Twitterは6%であった。また中学生になるとその割合は一気に高まった。ただこれらのSNSは、共通して13歳未満の利用を禁止している。年齢制限を守ることで、少しでも児童の犯罪被害が減少することを願う。

身近な人だけでなく不特定多数の人と容易にやり取りができることがSNSの魅力でもあるが、これは犯罪への入り口が多数あるということでもある。まだ判断力や責任能力が十分に備わっていない子どもたちがSNSを利用する場合は、保護者など周りの大人が利用状況を管理することが求められる。

（佐瀬玲奈）

大学の友人と入学式前に知り合う!?

SNS上でのコミュニケーションが、対面での人間関係に発展することもある。ここでは、SNSの利用状況について本学学生を中心に実施したアンケートの結果を紹介したい。

質問内容は、「SNSで知り合った人と実際に会ったことはあるか」また、この質問に「はい」と答えた人に対して、初めて会った時の年齢や会うことになったきっかけ、その時感じたことは何か。以上の項目について回答をいただいた。

アンケートに回答した60人のうち、約4割の26人がSNSで知り合った人に実際に会ったことがあると回答した。その大多数は大学入学後に初めて会ったと答えたが、15歳で初めて会ったと回答した学生もいる。個人差はあるものの、中学生の頃からインターネットを介して、直接人と会うといったことが行われているようだ。

続いて、直接会うことになったきっかけについて得られた回答を紹介していく。その中で最も多かったのが共通の趣味を介した繋がりだ。同じ高校や大学で共通の趣味を持つ友人を探すのは、マニアックな趣味であるほど難しい。しかし、SNS上においては、リプライなどを通じたコミュニケーションを気軽に楽しむことができる。現実のSNS上での印象と異なると答えた人はほとんどいなかった。

次に多かったのは、大学入学を機に作成したSNSアカウントでの交流をきっかけとするものであった。大学名、学部、学科をプロフィールに設定すると、同じ大学に入学する人を探すユーザーからのフォローやコメントなどが得られる。本学の学生も「#春から学習院」というハッシュタグを目にしたと答えた人は少ない。

先に2つ挙げたものの他に、インターンシップを目的としてSNS上で出会った人と会ったと回答した学生もいた。これは、社会人と学生の交流を目的としたアプリを利用した体験であるそうだ。「ダイレクトメッセージでのやり取りや1回目に会った時に感じたイメージはとても感じのいい人だった。しかし、2回目には宗教勧誘をされて、本題とはとは違う話になり見損なった」と語った。

SNS上での交流が実際の人間関係に発展することは、当たり前になりつつあることが今回の調査により分かった。多くの人はトラブルなく安全に利用できているようだ。しかし、アンケートに回答した学生の中には、自らが年齢を詐称した経験があると述べた者もいた。実際と異なっていても、プロフィールに書き込んだ年齢で周囲のユーザーに認知される可能性は高く、相手を騙すことも容易である。利用経験の浅い子供を騙すことは難しいことではない。もちろん大学生である私たちも細心の注意を払わなければならないのである。

（門馬清登）

主要なSNSの特徴と注意点とは

現代ではスマートフォンを持っている多くの人がSNSを利用し、個人が多くの情報を手に入れることができるようになった。便利になった一方で未成年を狙うSNSを悪用した事件が増えている。そうした事件に巻き込まれないためにはSNSの特徴を理解して使うことが必要だ。そこで今回は、主要なSNSとして挙げられるTwitterとInstagramの違いに着目したい。

Twitterは自分の知り合いではない人に情報が届くことがある。また、ネットで検索をかけたとき、投稿が引っかかる場合もあるので拡散力が高いと考えられる。

対してInstagramは写真を中心としたSNSである。自分で画像を加工して投稿することが多い。投稿した写真を共有するのは主に実際の友達や知り合いで、自分がフォローした人以外の写真を見ることは少ない。

スマートフォンの普及により中高生もこれらのサービスを多く利用するようになった。SNSによって情報の発信や共有は容易になったが、そこには危険も潜んでいる。使う際には細心の注意を払う必要がある。

（阿部玲）

犯罪から我が子を守るには

SNSを通じて知り合った人と出会い、幼い子供達が被害に遭うという事件が多発している。世界中の人々とボタンひとつで繋がることが容易であり、その利用者の低年齢化が問題視される現代。ここでは、我々自身が利用する上で注意すべきことだけでなく、将来親になった時にどのように子供を守るべきか、専門家の意見も交え対策を考えていきたい。

まず、フィルタリングを徹底することが大切だ。これは、未成年者が携帯電話を契約する際に携帯事業者に対して2018年から義務化されている。多くの携帯会社が提供するフィルタリングサービスは、未成年者が有害なサイトにアクセスすることを防ぐための工夫がなされている。子供の年齢を選択しそれに応じてアクセス可能なサイトや利用できるアプリケーションが増える仕組みである。このサービスによると4段階あるうちの全ての段階の初期設定では、Twitterは利用できないようになっている。LINEは、「高校生プラス」というフィルターでのみ利用可能となっている。フィルター使用中であっても親の同意が得られれば他のアプリも使用可能だという。

また、親が子供の使っているアプリやサイトを把握したり利用時間をチェックできる「ペアレンタルコントロール」という機能も有効である。AppleやGoogleなどがオプションで提供しているサービスだ。

これらの機能を使う際には子供と会話しながら使用時間を制限できるため、『このアプリは1時間の利用でいい？』など親子間でコミュニケーションが生まれる。そしてこの会話が子供の心理的ブレーキにつながるといった提案をする専門家もいる。

このように親が子供の行動をもともと制限するフィルタリングやサービスなどは存在するが、それだけでは十分とは言えない。やはり大事になってくるのは親子間の事前の話し合いである。家族のスマートフォンの使用ルールとして有名なものがある。アメリカのブロガーである母親が、13歳の子供にスマホをプレゼントする際に一緒に渡した18の決まりごとが、世界中から高く評価されている。この「18の約束」では、「スマホは親から子に貸し与えられたものである」旨や、利用時間やネットの怖さに加えて「スマホに頼りすぎないこと」が明記されている。

親は子供の全てを把握しきれない。だからこそ、いつでも相談できる信頼関係を築いておくことが子供を守るための最も有効な手段なのだ。

（長尾亜斗）

記者の眼

詐欺にひっかかるな！

皆さんは、大学生になってから、詐欺にあったことはあるだろうか。あまり実感がないかもしれないが、この社会では多くの詐欺が横行している。メディアで取り上げられる詐欺の代表的な例として、振り込め詐欺や、オレオレ詐欺が挙げられるが、その対象の多くは高齢者である。学生の中には、私たちはまだ若いため、騙されるはずはない、と安心している人も多いだろう。だが、成人年齢引き下げが迫る昨今、新成人となった私たち大学生を標的とした詐欺が増えていることも、現実として受け止めなければならない。

私たちは、成人になると多くの制限から解放される。その最も大きなものは、保護者の許可なしに、自分の意志だけで契約締結をすることができるようになることだ。この契約には、一人暮らしの賃貸借契約や携帯電話の契約、アルバイト・就職などの雇用契約、クレジットカードの契約も含まれる。これだけを聞くと、出来ることが格段に増え、自由を手にしたと喜ぶ学生も多いだろう。だが、自分の意志だけで契約できるということは、つまりそれに関わる責任を全て自分で負う必要があることだ。

大学生が被害に遭いやすい詐欺

学生に身近な話題として、「投資詐欺」というものがある。これは10万円投資すれば、月2万円が利回りとして手元に入ってくる」などの手口で、詐欺を仕掛けてくるものである。将来の収入源として、投資に興味をもつ若者が増えている現状から、冷静に考えたらありえないような話を持ち込み、知識の乏しい大学生を陥れる。

投資詐欺のもう一つの手口は、投資用教材ビデオや、投資をするうえで有利になりそうな情報を売りつける「情報商材」だ。落ち着いていれば、その情報の真偽を確かめ、検討することができるが、詐欺グループはサクラを用意し、同じ大学生でも実際に稼ぐことができた、という具体例を用意し、口コミ形式で多くの大学生の興味を引き付けている。

以上の記事を読んで、私はこの手の詐欺には引っかからないな、と思う人もいるだろう。だが、詐欺グループもあの手この手を使い、いつの間にか私たちに近寄ってくる。大学生である私たちは、本契約の前に一度立ち止まって、その契約が本当に自分自身に必要なものなのかを見極める必要がある。

（井ヶ田友一）

和の慣習～冬の味覚!?ひつまぶし～

ウナギの旬が秋から冬であることを、皆さんはご存じだろうか。今回は、ウナギ料理の代表格である、ひつまぶしについて紹介したい。

ひつまぶしとは、細かく刻んだウナギの蒲焼きをお櫃に入れたご飯にまぶした名古屋料理である。お櫃から茶碗に取り分けて食べるのだが、一杯目はそのまま、二杯目はネギやわさびなどの薬味を添えて、三杯目は出汁を注いでお茶漬けにして食べるのが一般的だ。

ひつまぶしの語源は諸説がある。ご飯にウナギをまぶして食べることから「櫃塗し」と呼ばれるようになったという説や、関西ではウナギのことを「まむし」と呼ぶことから「ひつまむし」が「ひつまぶし」に変化していった説などがある。

なかなか食べる機会が少ないひつまぶしだが、市販の蒲焼きでも簡単に家庭で楽しめる方法がある。まず蒲焼きを温める時は電子レンジではなく、フライパンかオーブントースターを使うのがポイント。水分が出てべちゃっとした食感になるのを防ぎ、カリッと香ばしく仕上がる。温める時にアルミホイルに蒲焼きを乗せて、酒をふることでより豊かな風味が楽しめる。

高級食材のイメージの強いウナギだが、ひと手間加えることで家庭でもお店の味を再現できる。ぜひ旬の今の時期に紹介した食べ方でひつまぶしを堪能してもらいたい。

（兼杉翼）

企画　長尾亜斗
構成・レイアウト　豊田凛
取材　佐瀬玲奈
門馬清澄
阿部玲
井ヶ田友一
兼杉翼

冬の鍋特集

体が温まるご当地鍋

寒さも少しずつ厳しくなり、本格的な冬の訪れを感じられるようになってきた。そんな寒い冬に食べたくなるのは、熱々の鍋料理ではないだろうか。今回は、日本各地の美味しいご当地鍋を紹介したい。

まず初めに紹介するのは、秋田県の「きりたんぽ鍋」。きりたんぽとは、硬めに炊いたうるち米を杉で出来た棒に竹輪のように巻き付けたものである。それを棒から外し、野菜や鶏肉と一緒に煮込んで食べる古くから伝わる秋田の郷土料理だ。

次に紹介するのは茨城県の「あんこう鍋」。あんこうは、茨城の冬の味覚を代表する食材である。コラーゲンが豊富で低カロリーなため、女性にも嬉しい魚だ。十二月から二月が最も美味しい時期となっており、鍋の味付けは主に味噌味、醤油味がある。あんこうの切り身や肝の他に白菜や長ねぎ、豆腐や椎茸などたくさんの具材で煮込んで食べるのが一般的だ。

そして、同じ魚の鍋で外せないものが、山口県の「ふぐちり」。ふぐと言えば山口の下関ふぐがとても有名である。ふぐの鍋料理のことをふぐちりと呼ぶが、「ちり」とは、魚の切り身鍋のことを指しており、関西では、「てっちり」とも呼ばれている。シンプルな昆布出汁にふぐの切り身や骨、白菜そして豆腐などを入れて煮込み、つけダレはポン酢で食べるのがおすすめ。締めは、ふぐの出汁をたっぷり含んだ雑炊にすると、最後までふぐの旨味を味わうことができる。

以上三つ、おすすめの鍋料理を紹介したが、他にも様々な工夫を凝らした美味しい鍋料理が全国各地に存在する。是非この寒い冬、身も心も温まる鍋料理を友人や家族と楽しんでみてはいかがだろうか。

（大野馨督）

寒さが厳しさを増す今冬。寒さが身に染みる夜には、暖房の効いた部屋で温かい鍋を食べたくなる。今回は、冬の味覚を楽しめる鍋を紹介する。

今が旬、鍋に使える冬の味覚

冬によく食べられている料理と言えば、鍋だろう。ここでは冬の鍋料理に使える食材を紹介したい。

一つ目は、春菊である。春菊と聞くと、多くの人は旬は春だと思っているかもしれない。たしかに春菊は春に花を咲かせるが、実際の旬は11月から2月の間なのだ。茎や葉が柔らかくなり、他の時期よりもおいしく食べることができる。今まであまり春菊を食べてこなかった人に、この機会に是非おすすめしたい。

二つ目はネギである。ネギは様々な鍋料理で脇役として活躍をしており、11月から2月の間が最もおいしく食べられる時期だ。

「風邪をひいたときはネギを首に巻く」。この言葉を耳にしたことがあるのではないか。この方法は、実際には効果がほとんど期待できないらしいのだが、このような話が生まれるほどに、ネギにはたくさんの栄養が含まれている。しかしネギの栄養素であるアリシンは、水にすぐ溶けてしまう。そのため鍋に入れた時には、スープまで完食してほしい。また、ネギは熱を通すと甘く柔らかくなるため、様々な料理で活躍することは間違いないだろう。

三つ目に紹介するのは大根だ。冬の時期に収穫される大根はみずみずしく、甘いものが多い。また根の部分だけでなく、葉の部分も食べることができて、そこには栄養がたくさん含まれている。根の部分は煮込むと汁の味が染みていく。大根は汁の色に合わせて染まっていき、溶けていきそうなほどになるのだ。出汁は和風なものが合うだろう。さらに大根の葉も捨てることなく、一緒に摂ることも忘れてはならない。

最後にあんこうを紹介する。東のアンコウ、西のフグと言われるほどに鍋料理では定番の食材だ。11月から3月にかけてがあんこうの旬である。あんこうは七つ道具と呼ばれている。その由縁は、肝・胃・皮・ひれ・えら・卵巣・身と、骨以外のほとんどの部位を食べることが出来ること。あんこうはコラーゲンたっぷりで美容に効果がある。ビタミンなども豊富に含んでいて健康に良く、味も優れている。そして脂質が少なく、低カロリーであるため、多くの女性を惹き付けている。また、多くの人を魅了してやまないのはあん肝である。あん肝は珍味として知られていて、海のフォアグラと呼ばれるほどだ。江戸時代には、三鳥二魚と呼ばれて将軍への献上品としても扱われていたほどの高級食材であった。その癖のある味は一度食べたら忘れることはできないはずだ。

単に食べるだけでなく、食材の旬やその歴史に目を向けることで鍋を楽しめるだろう。

（若林佑弥）

未知の味との出会い

ひとつの鍋を囲んで食事を楽しむという文化は日本だけのものではなく、世界中の様々な国に根付いている。今回は、それぞれの国や地域の特色が見られる鍋料理をいくつか紹介したい。

まず、タイ料理の定番「トムヤムクン鍋」。「トム」が「煮る」、「ヤム」が「混ぜる」、「クン」が「エビ」という意味を持つ。世界3大スープの1つと言われる、辛さと酸味のバランスが魅力の鍋である。具材はエビを基本とし、魚、野菜、キノコ等をたっぷりと用いるのが本場の味だ。

次に、マレーシアの「バクテー」。漢字では「骨肉茶」と記されるこの料理は、シナモン、胡椒、八角、クローブ等が入ったスープで豚肉を煮込んで作る。かつての労働者たちが肉の骨からとったスープをお茶代わりに飲んだことから名付けられたという。あっさりした醤油味のスープがご飯によく合う逸品である。

最後に、内モンゴル地方の伝統料理「ホイツァイ」は、野菜と羊肉を使った鍋料理だ。野菜とキクラゲ、そして羊の肉やモツ、モンゴル春雨、じゃがいもといった貴重とされていた食材が入っている。また、ニラの花を発酵させた「韮菜花（ジョウツァイタイ）」という調味料が特徴的だ。

このように、世界には未知の味との出会いがある。是非旅先で食べてみて、また国内で現地味を探してみて、新しい鍋料理を見つけてほしい。（元山咲紀）

安くて簡単鍋レシピ

体の芯まで冷えるこの時期は、熱々の美味しい鍋料理が食べたくなる。しかし、外食鍋では体は温まっても懐は寒くなるばかり。そこで「切って煮込むだけ」という調理の簡単さを生かした、自宅で作れる絶品鍋レシピを紹介したい。

まず紹介したいのが冷蔵庫の野菜で作れる、定番の「寄せ鍋」だ。

作り方❶鍋に水と昆布を入れ沸騰させる。❷いちょう切りにした人参、大根、一口大に切った白菜、ネギ、シイタケ、エノキを入れる。❸野菜に火が通ったら、水菜、小さく切り分けたタラの切り身と豆腐を入れ、一煮立ちさせたら完成。シンプルで落ち着く味わいの鍋だ。お好みのつけだれはポン酢で、アクセントに柚子胡椒を加えても美味しい。〆は残ったスープでうどん。野菜とキノコの旨味がしみ出したスープで作るうどんは絶品だ。

次に紹介したいのは、心も体も温まる、「鶏しょうが鍋」だ。

作り方❶鍋に水、和風だし、醤油、すり下ろしたしょうが一片を入れて沸騰させる。❷一口大に切った鶏もも肉、豆腐、ネギと短冊切りにした油揚げ、白菜を入れて一煮立ちさせる。❸最後に細切りにしたしょうがをトッピングしたら完成。さっぱりとした鶏の出汁でピリッと辛いしょうがの香りが際立つ鍋を食べれば温まること間違いなし。最後に残ったスープにご飯と溶き卵を入れれば雑炊を楽しむこともできる。

最後に紹介するのは、食べるスープ感覚で楽しめる、変わり種の「洋風トマト鍋」だ。

作り方❶鍋少なめの水、トマト缶、コンソメを入れて沸騰させる。❷ウインナー、食べやすい大きさに切ったキャベツ、シメジ、人参、玉葱、ジャガイモを入れて、ひと煮立ちさせれば完成。お好みで鶏の手羽先を入れても美味しい。トマトベースで具沢山な鍋は普段不足しがちな野菜をたくさん摂ることができる。タバスコを加えるとスパイシーな鍋に早変わりするので、辛い物が得意な方にはお勧めしたい。単調な味に飽きたら、ご飯を入れ、チーズをかければリゾットに変身するので、飽きることなく楽しめる。

おすすめレシピとして3つの鍋を紹介したが、鍋には無数のレシピが存在する。冷蔵庫の残り物で作るもよし、市販の出汁を使うもよしと万能な料理だ。調理が簡単で美味しい鍋が、外で冷えた体を内側から温めてくれることは間違いない。自分に合った絶品あつあつ鍋で、寒い冬を乗り切ってみてはいかがだろうか。

（佐野貴宏）

企画　佐野貴宏
構成・レイアウト　吉川真由
取材　大野馨督
　　若林佑弥
　　元山咲紀
　　豊泉達也
　　飯田壮一
　　田中大貴

アート日和　美術展こらむ

JR上野駅公園口改札から徒歩5分、国立科学博物館では、『特別展　ミイラ～「永遠の命」を求めて』が開催されている。

その名の通り、ミイラをテーマとして取り上げている本展。あまり目にすることのない当テーマに、ある種の奇妙さを覚えるのではないだろうか。ミイラはその存在の特殊さから、長らく学術的な関心が向けられることが無かったという。しかし20世紀以降、世界各地で学術的調査が行われるようになった。現在は最新の科学技術により調査がなされ、ミイラの背景にある多様な文化が明らかになりつつある。

本展には、世界各地のミイラが一堂に会している。それぞれの持つ姿、形は地域ごとによって大きく異なり、ミイラの持つ文化を容易にうかがい知ることができる。ミイラには自然ミイラと人工ミイラの2つの種類が存在し、その形態差にも注目だ。ミイラにされたのは人間だけでなく、動物のミイラも存在する。これは、死者の食事として、来世のペットとして、また神への捧げものとして作られていた。

今回の注目の展示は、福島県石川郡浅川町の貫秀寺に安置されている即身仏「弘智法印　宥貞」である。即身仏とは、高僧や修行者が、土中や像の中の石室で瞑想を続けることで到達する体の状態をいう。彼は火事や震災に見舞われるも、その都度、周囲の人々によって救われ、現在もその姿を残している。数々の苦難を乗り越えたその表情は、穏やかさに加え、どこか力強さを感じる。

本展の開催期間は2019年11月2日から2月24日まで、開館時間は9時から17時、休館日は月曜日である。上野の地に集う彼らの姿と向き合い、「永遠の命」を感じていただきたい。

（豊泉達也）

ミイラ、命と向き合う

ベンジュの棺　木エジプト　紀元前800年頃　第3中間期、第22王朝～第23王朝　レーマー・ペリツェウス博物館所蔵　ROEMER- UND PELIZAEUS-MUSEUM　HILDESHEIM

» BOOK

認知機能と非行少年

『ケーキの切れない非行少年たち』
宮口幸治著

非行少年。この単語から、どのようなイメージが思い浮かぶだろうか。今時では、非行少年と言われてもあまり想像できないという人もいるかもしれない。

本書では、非行を犯した少年たちの心に精神科医として長年の間付き添ってきた著者が、認知機能という観点から非行を分析している。著者のこれまでの勤務経験を元にした分析は、非行少年たちの心や能力の根本に迫った説得力のあるものであり、非行と認知機能の関連を興味深くかつ切実に我々に伝えてくれる。

認知機能というのは物事を認識するだけでなく、未来のことや相手の気持ちなどを想像する際にもかかわってくる能力だ。この能力が弱いことで「これをしたらどうなるのか」がわからずに非行を犯してしまう少年も多いという。

認知機能というと何やら生まれつきの能力で、後天的には代えられないような印象を受ける。だが著者によると、専用のトレーニングで認知機能を向上させることもできるようだ。子供たちが人との会話が苦手だったり、周囲に気を配ることができなかったりするのを「どうにもできない生まれつきの個性」としてしまうことは簡単だ。しかしそういった問題を大人たちに放置されてしまった結果、非行に走ってしまった少年も多くいるのである。そういった少年たちの認知機能を向上させ、社会生活に溶け込ませてあげられれば非行による不幸も減り、よりよい社会になっていくのかもしれない。本書の認知機能と非行の分析から、現在の社会の問題点について一考してみるのもよいだろう。

（棚）

税込792円　2019年）

都内初！！　詳しくはホームページまで！
H30．1月より新学科教材導入！
大江戸線：練馬春日町駅徒歩7分
運転免許取るなら!!
北豊島園自動車学校
東京都練馬区春日町4-37-24
TEL.03-3990-1176
http://www.kitatoshimaen.co.jp
5路線28駅にアクセスの「無料送迎」バス運行中！
都内最大級の教習コースで　のびのび教習！！
大型二輪　普通二輪　普通車
お問い合わせだけでも大歓迎です！！
北としま　検索

祝・百周年 歴史を振り返る

山岳部

開会の挨拶をする荒川氏
（撮影・田中大貴）

創立百周年

本学輔仁会山岳部は、大正8年4月の創部以来、令和元年に創立百周年を迎えた。創部の節目を祝う記念式典が、11月30日に学習院創立百周年記念会館にて開催された。

記念式典では、本学山岳部長の荒川一郎氏による挨拶から始まり、2つの講演の後、懇親会が行われた。

さらに、会場には百年を振り返る展示品が並ぶ。多くの卒業生が集まり、登頂記録の写真や、在籍していた当時の部誌を見て思い出話に花を咲かせていた。また、遠征隊が持ち帰ったエベレストの石やアラスカに生息するヘラジカの角などが展示された。

特に注目を集めていたものは、100年以上前に作られた絹のザイルである。ザイルは主に登山で使われている。現在はナイロン製のザイルが流通しているため、絹で作られたザイルはかなり珍しい。絹は、濡れてもしなやかさを失わず、強度も落ちないことから上質な素材とされていた。しかし、絹のザイルは高価であるため頻繁に生産されることはなかった。貴重な展示を目の前に、多くの人がカメラを向けていた。

記念式典の講演では、本学山岳部や登山の歴史について話があった。また、荒川氏は冒頭の挨拶で「山登りは数あるスポーツの中でも変化が大きいものであると思われます。登り方、対象の山、道具など様々なものが時代と共に変化を続けています」と話した。

山岳部の歴史

桧垣陽三氏の講演では、山岳部の黎明期について話があった。1905年に日本山岳会が設立されたことにより、これに触発された学生が活動を始めたことが創部のきっかけである。創設当初は、輔仁会旅行部として活動をしており、主に夏の登山や積雪期のスキー、冬登山などに親しんでいたとのことだ。

現在の山岳部という名称は、1925年に改称された。また、1920年代に他大学でも登山が創設されたようである。

また、福岡孝純氏による講演では、山岳文化について「ルネサンス期のヨーロッパでは、山は悪魔の住処であると言われていました。そこで彼らは登山をすることでこれを克服しようとしたのです。山に登ることと自体を目的とした登山は人々のチャレンジスピリットを育みました」と語った。

今後の歩み

現在、山岳部は5人の部員が所属している。彼らは夏・冬・春に行う合宿に向けて日々トレーニングを重ねている。部員の山上耀一郎さん（日4）によると、日々の練習として、体力強化と知識の習得が必要であるそうだ。体力強化の面では、週に2回、5キロのランニングと筋トレが欠かせない。また、女性は30キロ、男性は40キロを超える荷物を背負い、坂を登る「歩荷」と呼ばれる練習を行っている。さらに、安全な登山活動のため、机上講習も行っている。

また、合宿の目的地は、参加する部員の体力や技術に合わせて決めている。今年度の夏合宿で、部員の須貝綾菜さん（営4）は、登山中に滑落をしてしまった経験から、厳しい岩に登ることを恐れていた時期があったそうだ。しかし、仲間と練習を重ねて恐怖心を克服し、入部当初からの目標であった槍・穂高全山縦走に挑んだ。

山岳部創立百周年にあたり、須貝さんは「100年という長い歴史の節目に山岳部に所属できて嬉しいです。今後2、300年先まで続いてほしいので、もっと多くの人に入部してもらえるように頑張ります」と意気込んだ。時代が移り変わっても、山岳部の登山を楽しむ心はきっと変わらないだろう。（鈴木汐里）

果敢に攻め込む安達選手
（撮影・清水結衣）

Gakushuin Sports
1部の星を勝ち取る
ラクロス部女子

気合十分

「対戦相手である駒澤大学の選手は、2部ですが体が大きい上に足も速く、2部の試合では10点以上もの点差をつけて、勝ってきている勢いのあるチームです」。主将である鈴木貴紅子選手（政4）は対戦相手についてこう話した。

本学ラクロス部女子の今回の対戦相手は2部を圧倒的な強さで勝ち上がってきた駒澤大学。現在1部に所属する本学は、1部と2部の入れ替えを賭けて今回の試合へ臨む。今回の対戦に関しての意気込みを聞くと、「次の試合は現チームでの最後の試合で、4年生は今までやってきたことをすべて出し切ろうと思っています。さらに、今回負けてしまい2部に降格になると来年のチームが日本一を目指すことが難しくなってしまうので、必ず勝ちたいです。学習院が今まで30年間に渡って築きあげてきた1部という立場を守るために、最後まであきらめずに戦います」と熱く語ってくれた。

劣勢なるも

多くのギャラリーが見守る中、試合は始まった。第1Q開始から速攻を試みる本学は先制シュートを放つが止められてしまい、駒澤大学の素早い反撃により得点されてしまう。その後も攻め込まれ、合計3点を失ってしまう。しかしそんな厳しい状況の中で、菅原真子選手（国社4）が隙を見逃さずにゴールを奪取。ここから盛り返したい本学はその後も相手と熾烈なボール争いを繰り広げるが両者得点には至らず、1―3とリードを許した状態で第1Qを終えた。

第2Q開始直後も攻めの姿勢を見せる本学。だが駒澤大学の厳しいチェックにより、なかなか得点に至ることができない。そんな中で高貝菜々子選手（政3）が相手のファールをきっかけにゴールへシュートを放ち、得点を挙げる。その後、意地を見せる駒澤大学に攻め込まれるが、先ほどの得点で勢いに乗った本学は相手のパスをカット。再び攻撃に転じ、菅原選手の放ったシュートがゴールを捉えたことで同点となる。

そこからしばらく本学の攻撃が続くが、一瞬の隙を突かれて失点してしまう。再び同点に追いつきたい本学であったが得点できないままに3―4で第3Qへと臨む。

反撃の狼煙

第3Qも激しいボールの奪い合いが繰り広げられる。開始直後、近見朋香選手（史2）が幸先よく得点を決めるが相手の猛攻に失点もしてしまう。

その後も両チーム一進一退の攻防が繰り広げられるが、ここで流れを変えたのが本学の多田麻美花選手（英4）だ。相手の攻撃をしのいでのカウンターで相手ゴールへ攻め入り、反撃の狼煙となる1得点を挙げる。それによって流れを引き寄せた本学はさらに高貝選手が得点、6―5の逆転に成功する。そこからも、得点にこそ至らないものの本学有利のペースのまま第3Qが終了した。

猛追撃

流れをつかんだ本学は第4Qも攻撃の手を緩めない。果敢に相手ゴールへ攻撃を仕掛け、パスとランのコンビネーションで駒澤大学を翻弄する。逆転のチャンスを与えることもなく、さらに追加で2ゴールを奪取。試合終盤に相手の粘りによって1失点こそしてしまうものの、最終的には8―6という結果で1部所属チームとしての貫録を見せつけ、見事な勝利を収めた。

次代へ繋ぐ思い

試合後、鈴木選手に話を聞くと、「1部リーグ戦最終日を終えた後、私たちは入れ替え戦で駒澤大学に勝つことだけを考えて練習してきました。色々な特徴を持つ選手がいる中、何度もスカウティングをし、相手選手一人一人を細かく分析し、何度も想定練習を重ねました。共に歩んできた仲間やいろいろな面から支えてくれた人たちの為にも勝ちたい。そして後輩に、日本一を目指せる環境を残してあげたい。その思いで全ての力を出し切りました。挙げきれない程にたくさんの人たちに支えられて、私たちはここまでやってくることができました。その感謝の気持ちを、勝利という結果で返すことができて本当に良かったです。こうして勝てたのも、最後まで私たちを信じて支えてくれた人たちのおかげです。本当にありがとうございました」と、感謝の気持ちをあらわにした。これから先、先輩たちの熱い思いを受け継ぎ、本学ラクロス部女子はさらなる進化を遂げていくことだろう。（田中大貴）

From editor

私は今年で二十歳になる。十歳のときに行った半分成人式では、こんなにも早く十年が過ぎると思っていなかった▼二十歳とは二十年生きたことで、その当たり前の事実に目がくらむ。平均寿命であったら、あと六十年ほど、今までの三倍生きるのかと思うと途方に暮れる。しかし、ここまで振り返ると長いようで一瞬だった。幸いなことに楽しいことに溢れていた。当たり前の出来事が、瞬く間に過去になっていく▼二十歳は成人の年であり、節目の年でもある。大人と呼ぶにはひよっこすぎるが、それでも「大人の仲間入り（仮）」くらいではあるのだ。気持ちも趣味も中学生のときとなんら変わってない。大人って案外子どもとやっと気づけた。歳を重ねても、変わらないのかもしれないね、変わらない部分も、変わっていく部分もすべてを認めていきたい。（縫）

ロッカールーム
本紙・村上が辿る本学アスリートの軌跡

一糸乱れぬ動きで「究極のチームスポーツ」とも呼ばれるボート競技。今回はボート部主将の石岡滉一朗さん（営3）にお話を伺った。ボート部に入ったきっかけは先輩と後輩の垣根がないため、部の雰囲気がよく、魅力的な先輩がたくさんいることに居心地の良さを感じたからだという。

主将に就任して数ヶ月、現チームの雰囲気は「他の部活と比べて人数は少ないのですが、全員のモチベーションの統一が達成できていて、全員が同じ目標に向かっています」と話してくれた。

シーズンオフの練習は基本的に朝に乗艇練習、午後にウエイトトレーニングなどを行い、月曜から日曜まで毎日練習に励んでいる。

日々ボートに時間を費やし汗を流す中、ボートをやっていて感じる競技の魅力は「ボートは究極のチームスポーツと言われており、体の動きから、力の入れ具合までそろえないといけない。また、心拍数がとても上がった状態でやらなければならないので、部員と多くのすりあわせや話し合いを経て、漕ぎが合い、タイムが上がった瞬間はすごく嬉しいです」と話してくれた。また「大会ごとにメンバーが変わり、そこで、それぞれが一つのチームを作り、そのプロセスを積み重ねていくことでチームを作る力が養われている実感を持てています」と充分に魅力を語ってくれた。

ボート部 石岡滉一朗さん（営3）

全日本大学選手権大会、通称インカレでは女子ダブルスカル8位入賞、男子舵手つきフォアは惜しくも敗者復活戦で敗退したが、大学ボート界最強とも言われる日本大学に2秒差に迫る好タイムを叩き出した。

チームの成長を実感している石岡さん。これからのチーム目標について「今年のインカレで達成できなかった男子舵手つきフォアで決勝A（1～4位）に進出したいです」と朗々とした口調で話してくれた。大学生活をボートに捧げ、成長を続けるボート部の活躍に目が離せない。（村上大晟）

謹賀新年

昨年は新入生２９名を迎え、現役生は４２名となりました。これからも、より多くの方に読んで頂ける大学新聞を発行してまいりますので、今後ともご贔屓の程、よろしくお願い致します。

学習院大学新聞社一同

訂正

「学習院大学新聞」第313号（2019年11月29日発行）1面の研究最前線に誤りがありました。

（見出し）
誤　近代文学の足跡を辿って
正　近世文学の足跡を辿って

読者の皆様並びに関係者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを、深くお詫び申し上げます。